

# コミュニケーションと英語教育のかかわり方

青 木 睦 子

## 目 次

1. はじめに .....	1
2. 言語とコミュニケーション .....	2
3. 言語の運用 .....	4
4. 英語教育の流れ .....	8
5. 英語教育とコミュニケーションスキル .....	11
6. 結論 .....	16
参考文献 .....	17

## 1. はじめに

永年、英語教育に携わって来て、英語の力をいかに育成をしたら良いのか、常に自問自答し、その場にふさわしい教授法を見出し、教壇に立っている昨今である。

近年「生きている英語」「教養のための英語」「実用英語」「グローバルな英語」と言った類のキャッチフレーズが、テキスト・学校案内の1ページに必ず見受けられる。しかしこの種の「～英語」とは何かと問われても、一言で答えるのは殆んど不可能である。

今日の激動する国際情勢を見ていると、国際理解「異文化コミュニケー

ション』が重要であり、そのためにコミュニケーション能力「多文化英語」能力<sup>(1)</sup>を育成すればよいのではないかと思う。このコミュニケーション能力とは、単なる「英米会話能力」ではない。国際理解とは英米理解を意味するものではない。いわば、英語を国際語として使用している人々の社会、経済、文化を含めて学習する事に意義がある。

日本人は長い歴史の過程で、受信技術を主として発展させ、発信技術に関心を示していなかったが今日の国際交流、国際化の進歩に伴って、日本人も積極的に意志表示する双方向の国際コミュニケーション能力や発信技術を身につける必要性が高まってきていると言える。

このような状況のもとで、語学教育の役割は重大である。特に外国語を勉強する事は、『文化を理解させる』ことでもある。母国語以外のコミュニケーション体系の原則を理解するようになり、外国語を仲介して、直接にしる、間接にしる、その文化に対して寛容になり、その文化と自分自身の間に、積極的な関係を作る様になる。以上の様に『国際理解のコミュニケーション能力』を前提にして、平成元年3月15日に告示された中学校学習指導要領・高等学校学習指導要領を確認し、今後の英語教育の一助になれば幸いである。

## 2. 言語とコミュニケーション

人間は、言語という意思伝達の手段を持っている。その手段を使って、我々は互いに話し合い意思の疎通をはかる。人間には、両者を隔てる距離あり、人と人の『間』が存在する。両者の『間』には不透明な質的差異 (gap) があり、それを成立するために人と人の間に語るに足りる情報交換 (communication) が必要となる。

次に話し手と聞き手の関係を考察していく事にしよう。話し手が何を感じ、何をどんな視点から見、何を考え、何を希望しているか等、つま

り話し手の『ところ』のことが、聞き手に見えない、不透明である、ということが話し手と聞き手の間の情報交流（コミュニケーション）の為の前提である。それは、話し手が話し手自身の創造的な言語活動によって、「自分の言葉」を生み語り出すことが出来、聞き手とは、全く異なる独自で、自由な言語主体であることを承認することに他ならない。そうしてこそ話し手（あるいは書き手）の発言は、独自で自由な今1つの言語主体である聞き手（あるいは読み手）に何か不確かなこと、新しいこと、予期しないことを含むことにより、聞き手の知識に、何がしかの変化を加える情報交流が可能になるのである<sup>(2)</sup>。この様にして話し手と聞き手がキャッチボールの様に、互いの意見、考え、感情を表現し情報交換されていくのである。communicationの語源をさぐって見ると、これはラテン語の“commūnīco”「分配する、分ける」という語から来ている。このことから、話し手と聞き手の考えを「分配し」意志を通じ合うという事になる。コミュニケーションとは相互に「伝達内容」を話し手と聞き手が共に「分ち合う」(share)という行為から来ている。

話し手と聞き手がコミュニケーションの場で、互いに聞き手になったり、話し手になったりというように、各々の役をバランスよく交替しながら、情報交換を遂行していく、その時、言語的 (verbal) 非言語的 (nonverbal) メッセージを媒介にして、相互に影響を与えあう。非言語とは言語以外の手段を通して行うコミュニケーションのことである。非言語コミュニケーションの研究のリーダーの1人、レイ・L・バードウィテルは、対人コミュニケーションを次の様に分析している。――二者間の対話では、ことばによって伝えられるメッセージ (コミュニケーションの内容) は全体の 35% にすぎず、残りの 65% は話しぶり、動作、ジェスチャー、相手との間 (ま) のとり方等、ことば以外によって伝えられる言葉以外の数多くの方法が対人コミュニケーション用の記号として使われている「ことばならざることば」が人間のあらゆるコミュニケーショ

ンに寄与するところ<sup>(3)</sup>大である。5. 英語教育とコミュニケーションスキルの中で(nonverbal)の意義を追求し、教育に与える影響を述べたい。

### 3. 言語の運用

語学教育の目標はいうまでもなく聞く、話す、読む、そして書くという4つの言語技能を習得する事である。言語を学ぶ事は、発話の文脈のみならず、発話が行われた時の状況、場面、人間関係及び、広くそれを取りまく社会的文化的背景において、もっともふさわしい文を使って、情報交換出来る能力、いわばコミュニケーション能力を育成する事にある。言語を運用するために H.G. ウィドウソンは、次の様にいっている。文法規則の知識に基づいて正しい文章を作り出す能力を言語用法という。普通の日常生活で、こういった知識だけを要求される事はない、つまり通常は言語を使用して文を作り、発話し、自分自身の意見を交換するコミュニケーションが言語使用という。

言語用法と言語使用の区別は、Saussure による *langue* と *parole* に関連し、Chomsky による *competence* と *performance* に関連している。

次に、言語運用の際に、上記の4つの技能の働きを H.G. ウィドウソン学説にもとづいて、追求していきたいと思う。

4つの技能のうち話す事と聞く事は、聴覚媒体を通じて表現される言語に関係し、読む事と書く事は視覚媒体を通じて表現される言語に関係すると言われている。これらの技能について考えるには、媒体によらず言語使用者側の活動によるという別の方法もある。つまり、「話す・書く」は、能動的あるいは産出的な技能と言われ、「聞く・読む」は受動的あるいは受容的な技能であると言われる。習慣的に用いられてきたこれらの概念は、次のような簡単な図を示す事が出来る。

言語用法について考える時には、言語技能を次ページの図の様に考え

	産出物・能動的 (productive/active)	受容的・受動的 (receptive/passive)
聴覚媒体 (aural medium)	話すこと (speaking)	聞くこと (listening)
視覚媒体 (visual medium)	書くこと (writing)	読むこと (reading)

るのが便利かもしれないが、言語使用について考える時には、このような考え方では、余り役に立たない。聴覚的、視覚的及び産出的、受容的という言葉は、言葉がコミュニケーションとしてどの様に実際に使用されているかというよりは、言語がどのような媒体で表出されているかを言っているのである。

言語用法に関して言えば、話す事は、能動的で産出的であり聴覚媒体を利用するという事はまさにその通りである。しかし言語使用という観点から話すことについて考えてみると、状況はいささか違って来る。まず話す事を通じて行われるコミュニケーション行為とは、通常相手と向かい合う相互作用の中で行われる。従って、話されたことば、相互作用においてその前後に話された内容とつながりをもって、始めて理解される。例えば、もし私が会話の途中で何かを話したとして、それ以前に話されていたことと関連のない孤立したものではなく、それは、他の人がその時まで話したことを理解した上で出てきたものなのである。従って、言語使用として話すという事は、相互のやりとりの一部であって、言葉を受容することと産出することの両方を含むこの意味で、話す技能は受容的参加と産出的参加の両方にかかわっている。又、話すという行為は、音声を作り出すだけではなく、ジェスチャーを用いたり、顔の筋肉を動かしたり、身体全体を動かしたりすることにもまさしくかかわってくる。こうした音声に依存しない表現の全ては、コミュニケーション

活動として話すことに附随し、視覚媒体を通じて伝えられる。従って、話す事をこのように考えると、それが聴覚媒体にだけ関与しているのではないことがわかる。

言語が言語用法として表出される事には、「しゃべる」speaking を使うこととし、言語使用として言語を話し言葉による相互作用において実際に用いる事には「話し合う」(talking) を使うことにしよう。これで「話し合う」はジェスチャーや顔の表情やその他の\*パラ言語的な現象を利用する活動ということになり、聴覚と視覚の両方の媒体を利用するといえる。また「話し合う」は相互作用に参加している一人が積極的な役割をする時には、産出的な部分を持っているとも言える。この「話し合う」の持つ産出的な面を「言う」(saying)と呼ぶことにする。しかし、「話し合う」の受容的な面はどうなるであろうか。ここで、「聞く」と呼ばれてきている技能について考えてみよう。

話し言葉を理解すると言う時には、次の二つのうちどちらかを意味する。つまり、言葉を言語用法として理解するのか、それとも言語使用として理解するのかどちらかである。一方では、耳で受け取った信号が当該言語の音韻組織と文法組織に結びつけられ、それによっていくつかの文が構成されている事がわかり、それらの文が、例えば、英語の文としては何を意味しているのかを理解する。従って、ある意味では、この場合の理解は語文義を認識することである。この種の理解を「聞く」(hearing)と呼ぶことにしよう。もう一方では、言語使用として言語を理解するためには、聞いた文のコミュニケーションとしての機能を認識しなければならない。つまり、それらの文がどんなコミュニケーション行為を

---

※ paralinguistics

(metalinguistics の一部をなし、言語構造以外の伝達行為。例えば声の調子や身ぶり等を研究対象とする) 新英知大辞典 研究社 p.1533

実際に果たしているのかを認識しなければならない。これは、ある文が使用された時、その文が相互作用の過程で前に述べられたこととどのような関係にあるのかを認識することにもかかわっている。このような認識は、言いかえれば、「話し合う」ことの受容的側面である。こうした活動を表わすのに、「聞き取る」(listening)という語を使うことにしよう。そうすれば「聞く」とは、ここでの定義では、聴覚媒体を通して伝えられる信号が語文義を持つ文であることを認識する活動であり、また「聞き取る」とは、相互作用において文がどのような機能を持っているか、つまり、言語使用の例として、どのようなコミュニケーション上の価値を持っているのかを認識する活動であるということになる。したがって、この意味では、「聞き取る」は「言う」に対応する受容的なものであり、聴覚媒体と同様、視覚媒体にも依存するものである。以上のことから明らかなのは、何かを「言え」ば、必然的に文を「しゃべる」ことになり、言われたことを「聞き取る」には、必然的に文を「聞く」ことになるということである。

しかし、「話し合う」とは、しゃべるために聴覚的媒体を使うということだけを意味するのではない。何も「言う」ことなしに文を「しゃべる」こともできるし、文を「聞いて」も、そのコミュニケーションとしての意義を「聞き取ら」ずにいることもある。「しゃべる」ことは「言う」ことを包含するものではないし、「聞く」ことは「聞き取る」ことを包含するわけでもない。本書でとった視点では、「しゃべる」と「聞く」ととは独立した異なる活動ではあるが、「言う」と「聞き取る」ととは「話し合う」という一つの活動の二つの側面であるという事である。こういった異なった能力を次ページの図のように表わしてもよいだろう。

言語教育に関して言えば、外国語コースの目標が話し言葉を扱う能力を養うことである以上、学習者が究極的に習慣しなければならないこと

	産 出 的      受 容 的		
聴覚的・視覚的	話 し 合 う (talking)		言 語 使 用
	言      う (saying)	聞 き 取 る (listening)	
聴      覚      的	し ゃ べ る (speaking)	聞      く (hearing)	言 語 用 法

は、身につけようとしている言語が「話し合う」ためにどのように用いられているかを認識することである。もちろん、ある種の状況においては、話し合うという一段上のコミュニケーションに必要な能力に移行する前に、まず「しゃべる」と「聞く」ことを教えるために時間を割いておくほうが得策である<sup>(4)</sup>。

#### 4. 英語教育の流れ

戦後の英語教育は、国際間の交流が乱発化すると同時に、言語学の発達による言語観の変化が生まれて来た。それは言うまでもなく、戦後一世を風靡したオーラル・アプローチであった。Charles C. Friesの方法は、講釈・訳読授業が主流であった当時の日本の英語教育に旋風を巻き起こし、教師及び学習者は、音声への関心を示していった。

「指導要領」は1951年に出された。その三巻の内容とするところは、英語科の取り扱い、英語指導の要領、実際的問題点の解明と最善の教授法と考えられるところのものの、の提示であった。発行5年後、1956年になって高等学校に関する部分の改訂版が出た<sup>(5)</sup>。この「指導要領」で基本的な線として出されている中等教育における英語教育の一般的目標は、英語を「ことば」として考えるという事である。即ち「聞く」「話し方」「書き方」を熟達させるために役立つ、種々の学習経験を通じて、「こ



とば」として英語の知識及び技能を発達させると共に、その課題を中核として、英語国民に対する理解即ち、その生活様式、風俗及び習慣に対する理解する能力を身につける事が目標であった。その当時の教授法によれば、外国語の究極の目的は、異なる言語背景をもつ人々の間に、出来るだけ十分な相互理解を達成することであった。その目的を達成するために、科学的理論に従って編集された新教材による口頭練習であった。この種の「口頭本位の学習」では、全ての新しい文型を、先ず口と耳を通して教えることが重視されるばかりでなく、生徒が初歩の全教材を容易に口で言える程度に学習することを求められた。

この学習法は、生徒の聞き方と話し方の能力を発達させるばかりでなく、読書力も養成し、究極において外国文化に対する理解力をも高める効果的な方法であった。Oral approach というまでもなく Fries によって開発され、その本来の目的は外国人留学生の英語運用能力を向上させるものであった。日本における Oral approach が期待通りの成果を上げる事が出来たであろうか。一つの欠陥としてコミュニケーション活動が教室内・教育外共に行れていなかったと言える<sup>(6)</sup>。それも、その当時の社会環境では、不可能であった事というまでもない。時の流れと共に国際社会に通用する日本人として、主体性を確立し、自らを相対化する態度と能力を有る様になり、おのずと外国語教育特に英語教育において、広くコミュニケーションを図るための国際通用語習得に重点をおく様になって来た。平成元年3月15日に学校教育法施行規則の一部を改正するとともに、幼稚園教育要領及び小・中・高等学校の学習指導要領を全面的に改訂した。

## 改善の基本方針

中学校及び高等学校を通じて、国際化の進展に対応し、国際社会の中に生きるために必要な資質を養うという観点から、特にコミュニケー

ション能力の育成や国際理解の基礎を培うことを重視する。

……途中省略

外国語の習得に対する生徒の積極的な態度を養い、外国語の実践的な能力を身に付けさせるとともに、外国についての関心と理解を高めるよう配慮する……以下省略<sup>(7)</sup>

昭和26年と平成元年の「指導要領」を重ねて見ると、初期の指導要領では「ことば」としての英語については、实际的、基礎的な知識を培う必要があった。この实际的、基礎的な知識、いわば、practical English の能力をあらわし、他の基礎的、体系的な理論英語いわば theoretical English の能力をあらわした。この二つ能力が融合統一される事を条件にして来たと思う。その当時は英語国民とは英米国民を指し、彼らの風俗、習慣、文化を理解する能力を養成する事にあった。

一方、平成元年の「指導要領」では、コミュニケーションの一手段の言語を通しての表現力の育成と強化、積極的な態度を養う。国際化を進む中にあって、諸外国の人々の生活や文化を理解し尊重する事である。国際化の進展に対応し、国際社会の中に生きるためには、まず我が国の文化、伝統に関心や理解を深めるとともに、日本人としての自覚を持って新しい文化の発展に貢献する事が必要になる、それとともに、諸外国の文化、社会、伝統に目を広げ、世界と日本とのかかわりに、自然に関心を持つ様になってくると思う。

平成元年の改善の大きな特徴は、「英語Ⅰ」、「英語Ⅱ」、「オーラル・コミュニケーションA」、「オーラル・コミュニケーションB」、「オーラル・コミュニケーションC」、「リーディング」及び「ライティング」の各科目を構成し、聞く事及び話す事の言語活動の指導を充実しようとしている事が良くわかる。新しい学習指導要領による英語教育を充実させるためには、中学校、高等学校、大学が連携して、教育していかなければならないと思う。国際化、情報化と叫ばれる時代に生きる若人に世界に羽

ばたいて活躍させるためには、読むこと、書くこと、聞くこと、話すこと  
の言語活動の指導のバランスのとれた、特に聞くこと及び話すことが  
一層充実したものを改善し、理想的な教育にするべきである。

## 5. 英語教育とコミュニケーションスキル

教室でコミュニケーションスキルを最大限に活用するには、どの様な  
手段をとったらよいのか。学生の進歩の度合いをふまえて進行していく  
には、どのようなスキルが必要なのか検討したいと思う。

教室での学習の目標は言語用法ではなく言語使用、言い返すならば、  
コミュニケーションである。その学習は communication practice で  
あって、pattern practice(くりかえし練習)ではない事を断定しておく。  
communication practice のドリルにおいて、学生は音声で受諾するのみ  
ならず自分自身、他人に個人的な情報を伝え、その情報に適応した応答  
を待つ。学生が伝達する語、句、文章はその状況に対応した内容であっ  
て、形式ではない。学生が形式的に不正確な応答をすると、教師は学生  
に正しい応答を与え、機械的なドリルにしてしまうことがある。これは  
いわば pattern practice であって communication practice ではない。  
communication practice の授業を進めて行く時に、教師側から学生に時  
間を与え、学生の創造力を活かし、その状況にふさわしい答えを待つ。  
その時に教師はあらゆる角度から質問をし、学生の語彙の範囲を広げ、  
学生の納得のいく答えが自然発生的に生れてくるように、授業を展開し  
ていく必要がある。

次に Adrian Palmer の「Teaching Communication」の中から、引用  
してみる。

例文：I would tell him to shut the door.

I would tell her to turn on the light.

I would tell them to bring some food.

上の文を習得させる為に、教師ののぞましい技術とは何か、それは学生自身の生活に関連した状況を口頭で創り上げる力である。それからその状況のもとで学生はその出来上った文章を使って何を伝えたいのか、その意味を学生自身に考えさせる時間を与え、納得させることである。

CAST: Teacher

Student—Paul

Student—Karen

Student—Susan

TEACHER: “Karen, if you and Susan came to class at 8 a.m. and it was winter and the room was dark at 8 a.m., what would you tell Susan?”

KAREN: (with any luck at all) “I would tell her to turn on the light.”

If Karen has trouble understanding the instructions, the teacher should repeat them, explaining the situation again or translating the original sentence. He must insure that Karen understands what she is replying to. If Karen answers correctly then the teacher turns to Paul:

TEACHER: “And how about you, Paul, if you were with Mary and you wanted to read, what would you do?”

PAUL: “I would tell her to turn on the light.”

TEACHER: (in student’s native language) “You as a boy would tell a girl to do that for you.”

TEACHER: (continuing in the target language) “Paul, if you came alone, and if I was in the room, what would

you do?"

This question is of a type which really forces the student to be imaginative. If he answers mechanically, he might say the following:

PAUL: "I would tell you to turn on the light."

At this point the teacher may react rather violently, accusing Paul of being impolite to a teacher and forcing him to see the implication of using the word *tell* in this pattern when addressing a superior. Or alternatively, the teacher might be more oblique and say:

TEACHER: "Then I would throw you out of class!"

This kind of a statement would make Paul and the other students think about the reason for the teacher's statement and reach the conclusion that they should not tell a superior to do something<sup>(8)</sup>.

このような学習方法は教師が学生達にある状況を示し、学生達にその状況に適した会話をさせることによって言葉の使い方を自然に習得させることを目的としている。このような communication practice は学生の発言に対して教師側が適切な応答をすることによってはじめて成立する。つまり、テープレコーダー等を用いた紋切形の会話の丸暗記である pattern practice と違い、communication practice では適応性に富んだ教師側の応答が必須なのである。従って、教室内における a live teacher の働きが極めて重要となる。

この communication practice を実践するタイミングとしては言語学習の最も初期の段階が効果的である。この初期段階において、遊びやドラマの中で学生の創造力を活かしながら言語を習得させるのが最も理想的な communication practice である。日本の語学教育においては、感情・願望・衝撃といったものを表す生きた必要にせまった言語を学ぶ機

会がほとんどない。表面的に言葉の音と意味を学習することに終わっているのが日本の語学教育の現状である。言語というものは人間がコミュニケーションしようという願望を持ち、人間の感情・意思が加わってはじめて、生きた表現のやりとりとして成立するものである。

現実の生活には、four driving forces 即ち usefulness, purpose, wanting, emotion<sup>(9)</sup> からなり、これらを満足達成するために、我々が望んでいる事を緊急に、言葉を組み立てその状況にあった事を表現する事が必要となる。状況にふさわしい言葉のやりとりの効果を上げるために “Dramatic Method”<sup>(9)</sup> が効果的ではないだろうか。

教師は、あるせりふ、言葉を紹介する時に、急いでみたり、興奮してみたり、みせかけのいかりをみせたりして、その場にふさわしい動作を加えてみる。教師の動作は全て、実社会に起る状況を再現している。その動作はユーモアに富み、学習者を引きつける。学生は現実の中の表現を理解し、living language の意義がわかってくる。学生は、本を読んで、内容を把握するよりも、教師の表情、動作 (nonverbal communication) を通して、言葉の表現、意味を、明白に理解出来るのである。それ故に、これらのジェスチャーは、学生の心の中に、強い印象として残り、言葉の意味を無意識の内に理解していくのである。

“Dramatic Method”の中には、言葉の調子、リズム、ジェスチャーというものは、必要不可欠なものである。集中力がなく、反応の悪い学生には、言葉の内容を理解させる為に、この Method は、効果的な教授法である。授業で進めて行くにつれて、学生は、言葉が学問であると同時に、コミュニケーションである事が、自然にわかってくる。学生は言葉を説明や事実を通して学ぶより、動作を通じて学び、まねをしたり、役割を演じたりして、言語学習していく<sup>(10)</sup>。このような授業の流れにより、学生は、言葉に対する感心が強くなって行く。徐々に、学生は、言葉と動作の向上が結びつき、教師のアドバイス、指示を受けずに、自然発生

的にシーンが出来上り，アクションを伴って，クラス全体に，会話が生まれる。その過程において，学生は，自分の演技を相手に理解させるための工夫をこらし，動作を加え，その状況にふさわしい言葉を選ぶ。その結果，学生は，究極的の目的である——「話し合う」（言語使用）——本来の言語の世界へ一歩進み，言語能力の発達が生れて来るのである。こういう段階を踏むには，教師側の創作（inventiveness）と機知（resourcefulness）の才が要求される。教師は，教材の提示の仕方を変化させたり，おもしろく好奇心をそそる場面に生徒を強引に引き入れて，今までに習ったことばで，自分の思うことを言いたいという自発的な欲求（spontaneous desire）を感じさせる機会を，絶えずいちはやくつくることのできなければならない<sup>(11)</sup>。

創作と機知が要求され，どの様に対処してよいのか思案する。

その一案として，外国語という科目は学校教育の他の科目と関連させ，広範囲に指導する事は可能ではないだろうか。例えば，物理化学の簡単な実験，料理の作り方，民話，寓話，伝記のドラマ化をして，教室内で，今まで習得した外国語を使って，会話をさせる。そうする事により，外国語が現実の世界と生徒の経験としっかり結びつき，外国語を単に言語用法としてではなく，コミュニケーションつまり言語使用として，最も確実に教える方法が得られる<sup>(12)</sup>。時には，物理，化学の簡単な実験等をビデオにおさめるのはどうだろうか。学生にもビデオ，映画作成に参加してもらい，外国語と他の教科の関わり方を認識してもらう。様々な経験を通して，学生は語学の必要性がわかって来る。作成したビデオを使って授業を展開するのは非常に効果的な教授法になると思う。

Marion C. Sheridan は motion picture の意義を次の様に述べている。ある 1 つのシーンが即時的なコミュニケーションを作り出す。その連続的な動きに伴って，学生は句，語，文章，の累積的な意味をおのずと理解していくのである。読み，書きよりは motion picture の糸状（liner）

コミュニケーションの方が視覚を通して、1シーンの中の物体、背景、音響効果が人間と人間のコミュニケーションや心の動きを学生は即座に理解出来るのである。

以上の様に教室でのコミュニケーションスキルを最大限に活用するために、色々な手段を述べて来た。確かに、教師の創作、機知の才を要求されるのは当然であるが、学生が積極的な態度が養われ、外国語の実践的な態度が身につく事の方が重要である。そして学生は外国についての関心と理解を高め、国際理解「異文化コミュニケーション」能力が育成されていくと思う。

## 6. 結 論

コミュニケーション教授法とは、人と人の間の不透明な質的差異を、どの様にして乗り切るのか。その質的差異を成立するために人と人の間に語るに足る情報交換（コミュニケーション）が必要となる。質的差異には、information gap, opinion gap, image gap, culture gapがある。これらの質的差異を埋めるために、言語的(verbal)コミュニケーション、非語的(nonverbal)コミュニケーションを使って、積極的に意思表示をし、発信受信技術を身につけ、国際交流の出来る学生を育成していかなければならないと思う。平成元年の指導要領の改善の大きな特徴である「オーラル・コミュニケーション」が平成6年4月より高校に導入された。同時に中学校、大学が連携して、英語教育を充実させ、コミュニケーションの方向が明確化される事を大いに期待している。

今回の報告はいわばコミュニケーションと英語教育の全般を考察したにすぎない。次回は、さらに詳細に研究を続け、実践に富んだ教授法を考えてみたいと思う。



### 参考文献

- (1) 橋本満弘著 英語コミュニケーション論 学書房
- (2) 萬戸克憲著 国際化と英語科教育 大修館書店
- (3) 和田 稔編著 オーラル・コミュニケーションの指導と評価 開隆堂
- (4) 現代英語教育 1994 年 4 月号 オーラル・コミュニケーションの A B C 研究社
- (5) 鈴木孝夫著 ことばと文化 岩波新書
- (6) J.V. ネウストプニー著 外国人とのコミュニケーション 岩波新書
- (7) 北出 亮著 英語のコミュニケーション活動 大修館書店
- (8) 渡部昇一編 英語のコミュニケーション論 スタンダード英語講座(6) 大修館書店
- (9) 三浦 孝著 英語のコミュニケーション授業の実際 第 1 学習社
- (10) H.G. Widdowson "Teaching Language as Communication" Oxford University Press
- (11) P. Gurrey "Teaching English as foreign language" Longmans
- (12) Adrian Palmer "Teaching Communication" The University of Michigan
- (13) Mary Ritchie Key "Nonverbal Communication Today Current Research" Mouton Publishers
- (14) Elmer D. Johnson "Communication" The Scarecrow Press, Inc
- (15) Marion C. Sheridan "The Motion Picture and the Teaching of English" Appleton-Century-Crofts

### 引用文献

- (1) 本名信行, 他 "異文化理解とコミュニケーション I" 三修社 p.176
- (2) 竹内敬一編 "言語とコミュニケーション" 東京大学出版 p.3-4
- (3) 石丸 正編 "非言語コミュニケーション" 新潮選書 p.15
- (4) H.G. ウィドウソン著 "コミュニケーションのための言語教育" 研究社出版 p.71~p.75
- (5) 高橋源次著 "英語教育展望" ELEC p.66
- (6) 現代英語教育 1994 年 3 月臨時増刊 研究社 p.41
- (7) 高等学校学習指導要領解説 外国語英語編 文部省 p.6
- (8) Adrian Palmer "Teaching Communication" p.57-p.58
- (9) P. Gurrey "Teaching English as a foreign language" Longmans p.51-p.52
- (10) W.M. リヴァール著 外国語習得のスキルーその教え方 研究社 p.48
- (11) W.M. リヴァール著 外国語習得のスキルーその教え方 研究社 p.46

18 コミュニケーションと英語教育のかかわり方

- (12) H.G. ウィドウソン著 コミュニケーションのための言語教育 研究社出版  
p.20